

一般の部 「特別賞」

「時子と銀歯」

「遠い日の思い出」から改題

富士市 篠原 静江

時子は、中学一年生になっていた。夏休みに入る頃にはつゆが明ける。その日から、毎日のように海に泳ぎに行くのが、小学校からの習わしだった。一日でも水に浸からないと、朝から暇をもてあまし、暑くてたまらなかつた。台風が来て海が荒れている時は、四キロメートル先にある、市のプールまで集団で泳ぎに行った。それでも旧盆頃になると、夏の終わりを告げるかのような土用波が現れ、引き潮が強くなってくる。

「お精靈シキリウさんが来ていて、さらわれてしま
うから、泳ぐのよそう」誰彼となく言って、海に終わりを告げるのだった。

時子は今年、浮き輪を買ってもらった。二、三人しか持っていない浮き輪が欲しくて、去年から母にねだっていて、やっと夏休みに間に合ったのだった。

海は急深で、泳ぎの練習には向かなかつた。小さな子は、波打ち際でパチャパチャ水遊びをする。大きな子たちは、背の立つ所まで足で確かめ、打ち寄せる波に乗り、岸に向かって泳ぐ練習をするのだった。そんな遊びでも、真夏の暑さを凌ぐには、海に入るのが一番だった。

八月に入っただばかりのある日、ジリジリ太陽が地を焦がす中、気温がみるみる上がっていった。そんな中、時子は朝から浮かぬ気持ちでいた。明け方頃から、歯が痛みはじめていた。それでも、みんなが集まっている。橋の袂たもとまで来た。

先程から「ズキン、ズキン」と痛みが脈を打ち始めた。これでは海は無理だと思つた。

「みんな、ごめんね。歯が痛いから今日はよしにするわ」

「明日は来れる？」

「歯が治つたらね。」

時子は仕方なく家に引き返した。

家には誰もいなかった。みんな畑に行っている筈だった。

朝一番に畑から野菜を収穫し、家に持ち帰る。陽の当たらない、北側の軒端の下で、明日、市場へ出荷するものをこしらえるのが、この辺の農家の日課だった。午後は暑すぎて、屋外での農作業はしづらかった。

時子は歯の痛みをこらえるのに、井戸水を含んでは捨て、捨ててはまた含んだ。

時子は裏に出た。いつものように葉ネギがあつた。少ない量であつた。

その内、家の者が運んできて、山のように積まれる筈だった。時子は葉ネギをこしらえ始めた。

「珍しいことがあるもんだ。時子が手伝つてくれているよ。今日は海には行かないのか。」

「本当だ。今日辺り、夕立が来るかもよ。」姉も言った。

時子は口に含んだ水を捨て、

「お母ちゃん、歯が痛い。歯医者に行くからお金ちょうだい。」

「それか。変だと思つた。」

かねは巾着を開け、お金を出して時子に渡した。

「口を大きく開けて。」

と先生は言った。

「むし歯だね。少し削ろうか。」

大きなカマキリのような手が延びて、ジリジリ歯を削り始めた。時子は身体中をこわばらせた。手と足を踏ん張っていると、

「力を抜いて。口をゆすいで。」
と何回となく声をかけられた。

ランプに火がつき、ピンセットであぶつたものを削った歯の中に沈めた。

「また来なさい。今日はここまで。」

時子は翌日は海で泳いだ。

一日おいて歯医者に行った。先生は歯の中に沈めたものを取って、ゴミ入れに捨てた。

口をゆすいだと、またジリジリ削り始めた。かなり深くまで削ったあと、穴の中にゴムのようなものを沈めた。指で何度も押していた。

「さて、これで治療は終わった。もう痛くはないね。」

「はい。」

「この歯を長持ちさせるには、銀を被せるといいんだが、どうだね。家の人に相談してみては。お金は八百円かかるって言ってるね。」

時子は、その事を母に言いかねていた。何故なら、今家で出荷している葉ネギ一つ例に取ってみても、八百円稼ぐのは大変である。時子は、午前中は海へ行っても、午後は野菜作りを手伝わされた。そんな時、野菜の値段を耳にすることがあった。

十日前には、葉ネギ一把、二十円から十五円の値がついた。今では十円から五円にしかならないという。

ナスやきゅうりは終わっていた。今ある野菜は葉シヨウガと葉ネギだけになった。秋には収入が減ってしまうだろう。自分だけ贅沢していい訳がなかった。

それから何日か経った夜、三人の姉達がラジオの前に待機していた。今人気のラジオドラマ「君の名は」が始まる時間だった。

ラジオの前を、行ったり来たりすると、目障りだと叱られるので、時子は縁側で涼んでいた。そこへ、風呂上がりのかねも涼みに来た。

「歯医者は済んだか。」

「うん、終わった。」

「どれ、どの歯だ。見せてみな。」

時子は口を大きく開けた。

「暗くてわかんないな。先生は何か言わなかったか。」

「何で？」

「今日、キヨの所へ行ったら、幸子も虫歯を治しに行ってるんだって。帰り際に銀歯を被せたらと勧められたようだ。」

「それで被せるって？」

「どうだか」

「銀歯なんか贅沢すぎるよ。」

「贅沢なもんか。やっぱり勧められたんだな」

時子は唾をぐくりと飲み込んだ。

「八百円もするんだよ。もったいないよ。」

「いいから被せてもらえ。」

「ええ！ふんとに？八百円だよ。」

時子は何度も八百円を繰り返した。

そんな時子の心配を打ち消すかのように、かねは急に自分の口に手を入れた。かねは「いいー。」

と言いながら、口の中を時子に見せた。

うす暗い縁側でも、変わり果てた母の口の中はよく見えた。白い歯が上下で四本だけあった。手には入れ歯が白く光っていた。

時子はふと、近所で時々見かける、貧相な老婆の口と同じだと思った。思わず目をそらした。悲しい気持ちだった。

かねはまだ四十七才であった。十人の子が授かり、九人を育て上げた。お産のたびに歯が抜け落ちていったという。

「時子はまだ十三才だ。大人になって、俺のようになっちゃ困るじゃないか。入れ歯になったら堅いものは噛めないし、何を食っても味が無い。つまらないよ。明日先生に頼んで来い。いいな。金のことは心配するな。」

時子は母の気持ちがあれしかった。その夜は銀歯が入ったら、口の中がどんなだろう。奥の歯だから変わらないかも。そんな問答をしながら眠りに入った。

次の日から時子の身に変化が現れた。今までは歯みがきをしたり、しなかったりだった。特に学校が休みの日は、サボりがちだった。

ところが朝は食事のあと、必ず歯を磨いた。磨いたあとは鏡に顔を映し、口を大きく開けて笑った。銀歯が奥の方でキラリと光った。心地よい幸せを感じた。

それと同時に、午後の手伝いも自ら動いた。歯シヨウガの水洗いは、手のひらが水にふやけてしわしわになるのは嫌だったけど、水から出ればすぐになおるから我慢した。

非農家の子から、遊ぼうと声がかかっても、手伝いがあるからと断った。そんな時子の変わりようにかねは感心しながら見守っていた。

夏休みが終わり、学校が始まった。

「時ちゃん、口の中で光っている歯、どうしたの？」

「ああ、これ、長持ちするからって銀を被せてもらったの。」

「おしゃれだね。」

そうではなくて長持ちするのだと言っても無駄なようで、繰り返さなかった。

時子は鏡に映る銀歯が、人の目にも届いているのだと知って、うれしい気持ちだった。

時子の銀歯が口の中で役目を終えたのは、それから五十年後のことだった。